

# 「池袋清風日記 明治二十二年」資料紹介・翻刻（一）

富田知恵子

「同志社は英学校であったが、和歌が流行した<sup>①</sup>」とは、同志社英学校で学んだ葛岡龍吉<sup>②</sup>が当時を回想した文章である。英語を用いて学問を修得する英学校において日本古来の詩歌である和歌が流行したのは、ひとえに桂園派の歌人、池袋清風という人物によるものであった。同志社社史資料センターには、「池袋清風日記」と称される資料が三冊所蔵されている。本稿では、その内の一冊である明治二十二年日記について紹介・翻刻する。

日記の著者である池袋清風については、昭和女子大学近代文学研究室著『近代文学研究叢書』第四卷（昭和三十一年九月）、河野仁昭著「近代化過程における伝統文学―池袋清風の英学と和歌―」（『人文科学』一〇号、一九七九年十二月）に詳しい。その経歴については、清風没後の明治三十四年（一九〇一）に門人の正宗敦夫が『山陽新報』に掲載した「池袋清風大人<sup>③</sup>」が基本資料となっている。ここでも、『山陽新報』「池袋清風大人」の「大人の履歴<sup>④</sup>」をもとに略歴を記す。

池袋清風は、弘化四年（一八四七）四月、当時薩摩藩領



池袋清風（中央）と下村孝太郎（向かって左）、横井（伊勢）時雄（右）  
（同志社社史資料センター所蔵）

であつた宮崎県都城で生まれた。六歳から藩校明道館で漢書を、七歳頃から祖父池袋清芳について和歌を学んだ。安政三年(一八五六)正月から都城領主、島津久静の小姓役となり、以後剣術、弓術、砲術、兵学を学ぶが、文久元年(一八六一)胃腸病を患い、身体衰弱により翌年から八年間にわたり療養生活を送る。

病が癒えた後、明治二年(一八六九)から四年までは薩摩藩の英国式軍制の下で操練に従事し、翌五年(一八七二)二月に鹿児島医学校に入学するが、ここでも感冒症に悩まされ、年中の過半を病臥しつつも翌年より医学校助教及び司書を命じられて、明治十年(一八七七)西南戦争で医学校が焼失するまで勤めた。翌十一年に師範学校伝習生の入学試験を受け、三か月で卒業すると、明治十二年(一八七九)四月から創設された鹿児島女子師範学校の教師となる。

この明治十二年に新島襄が鹿児島へ生徒の募集にやって来ると、英学校の目的「徳義と智識とを兼養するに在り生徒の品行端正なり」<sup>5)</sup>を聞き、清風は同志社英学校への入学を決めたという。清風は一年で鹿児島女子師範学校の職を辞すと、明治十三年(一八八〇)九月、三十三歳で同志社英学校に入学した。

和歌の心得については、幼時に歌人である祖父や大館晴勝、隈元棟貫に学び、療養生活の後、明治二年頃から独学していたが、同十一年夏頃より、のちに宮内省御歌所の歌人となる鎌田正夫が鹿児島の実家で催していた歌会に参加するようになった。薩摩藩では香川景樹の系統を汲む桂園派の和歌が主流で、鎌田や、清風が和歌を学んだ大館らも桂園派の歌人であった。清風は、この鹿児島滞在の時期に歌人たちとの交わりや熱心な研究により、和歌の素養を高めたようである。

同志社英学校では入学した翌年の明治十四年(一八八一)秋頃から、学生に乞われて和歌を教えるようになった。三輪長行、湯浅吉郎(半月)、大西祝、岸本能武太、安部磯雄らが、その門下として知られる。門下の学生

たちは、毎週土曜日に清風のもとへ各々作った和歌を提出し、清風はそれらを朱筆で直し、細評を記した後、次の題を出す、という教授法であった。<sup>(6)</sup>

一方、学業については苦手とする英語の習得が思うようにはいかず、明治十五年（一八八二）六月に学校を中退し、九月には新たに別科として創設された神学科に入り、同十八年六月に卒業した。同年九月から同志社女学校で教鞭を取るが、翌年六月には辞し、来日した宣教師夫妻に日本語を教えて生活しつつ明治二十一年五月に歌集『浅瀬の波』を発行し、さらには新聞や雑誌に和歌概論、和歌略史、また新体詩集への批判などを掲載すると、全国の多くの人から和歌の指導を求められるようになった。「案山子廻舎」（案山子乃舎）という社中もつくられ、明治二十七年刊行の『浅瀬の波』第二篇下の末尾に掲載された「案山子廻舎の諸社中 明治十二年より同廿六年末まで」によると、二百五十四名の社友、門人がいたようである。社中には新島襄の父親である是水（新島民治）、夫人の八重の名前も見られる。明治二十一年の九月からは同志社の図書館に勤務することとなり生活も安定し、明治二十年代は清風が歌人として充実した時期となった。

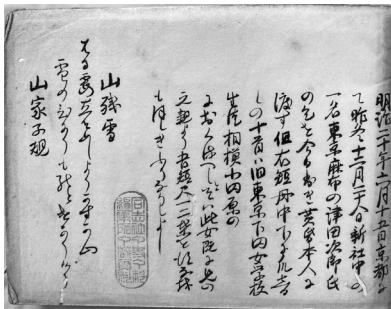
池袋清風は、当時同志社英学校では「奇人」として有名であり、多くの卒業生たちがその言動について回顧している。<sup>(7)</sup> 極度の寒がりでも夏でも綿入れの羽織を着、冬には何枚もの綿入れを着てストーブを独占する。かと思えば健康のために冬の寒い中でも賀茂川や、相国寺を流れる小川で水浴をする。さらには詳細な日記を時間にかけて毎日つけることで知られ、当時教員であった敬愛する下村孝太郎に、学業のためには日記に時間をかけるのをやめるよう忠告されてもやめることはなかった。<sup>(8)</sup>

清風が書き残した資料のほとんどは戦災により焼失したようであるが、同志社社史資料センターに明治十七年、二十二年、二十八年の日記と称される資料が三冊所蔵されている。大正十三年度に清風夫人である池袋時子

氏より「案山子舎詠草」四冊と日記一冊が寄贈されており、三冊の内一冊はこの時に、残り二冊は別時に収蔵されたものと思われる。

三冊の内、明治十七年日記については、すでに『池袋清風日記 明治十七年』上・下、(一九八五年三月 同志社史料室編・発行)として翻刻され、その詳細さゆえに、当時の英学校の様子を知る好資料となっている。昭和六年(一九三二)七月発行の『同志社五十年裏面史』には「もう一冊しか残ってゐない日記にも大小種々の面白い記事がある」と記述され、その紹介している記事の内容が明治十七年の記事と合致するので、昭和六年当時に一冊しか残っていないとされた日記は明治十七年日記と考えられる。このことから、大正十三年度に寄贈された日記は、明治十七年日記ではないかと思われる。

今回翻刻する明治二十二年日記は、明治十七年、二十八年のように日々の生活を記したものは異なり、いつ、誰にどの和歌を揮毫したかを記録したものとなっている。年代は表紙には「池袋清風日記 明治二十二年以降」と墨書されているが、内容としては明治二十年から記述されている。この明治二十二年日記には、昭和四十一年(一九六六)の所蔵印があり、その頃には社史資料センターに所蔵されていたようである。<sup>(1)</sup>縦一四・〇×横二〇・四センチメートルの横半帳。全一五三丁(表紙一丁含む、裏表紙なし)、後補と思われる黒色の綴込表紙で綴じられている。この綴込表紙の貼題箋に記された「池袋清風日記 明治二十二年」が資料名となっている。書き方としては和歌を数首記した後、その和歌をいつ誰に送ったか書く形式をとっているが、日記の冒頭部分では和歌が記されるべきところに記載され



「池袋清風日記 明治二十二年」冒頭部分

ていないことから、途中から綴じられたものと考えられ、分冊の可能性もある。揮毫先は、やはり同志社の学生関係が多い。また、求めに応じてキリスト教を詠んだ和歌をおくっているのも興味深い。清風は明治十四年（一八八一）五月に洗礼を受け、京都第二公会の執事もつとめたクリスチャンであった。<sup>(12)</sup>

清風は明治二十七年（一八九四）八月に結婚して大阪へ移った後、同二十九年八月に宮崎県都城へ帰郷。明治三十三年七月二十日、数え年五十四歳で亡くなった。

同志社英学校の創立者たる新島襄は、この和歌の流行についてどのように感じていたのか。明治十三年（一八八〇）に入学した小野英二郎<sup>(13)</sup>は次のように回想している。

今一つ同志社の学風で見逃す事の出来ないのは、池袋清風で和歌の奨励をした。岸本〔能武太〕、新原〔俊秀〕等はその弟子であった。新島先生はこれは嫌ハれた。或る時先生ハ、和歌が流行するのは困ると云ふ様な事を云ハれた。然し兎も角、京都はあ、云ふ土地でもありしたもので、頻りに和歌が起つた。

新島先生は察する処、私共の居つた時にも考へが變つたと思ふ。初めはミッシヨン school でやつて行こうと思ふて居た。然しあの人は根が国士の考へ<sup>(14)</sup>を以て居るから、次第二他の方面に延びる様にならねばならぬと云ふ議論が起つて来た。私の居つた十五六年頃から、其の考へが非常ニ盛ニなつて来て居られたと思ふ。

小野英二郎によると新島襄は当初、和歌の流行に困つたと漏らしていたという。新島襄が詠んだ和歌は残っているが、アメリカから帰国した後、十余年は学校経営などに忙殺されていたためでもあるだろうが、ほとんど詠まれていない<sup>(15)</sup>。しかし亡くなる数年前頃からまた詠むようになり、明治二十三年（一八九〇）亡くなる直前には、

詠んだ和歌を療養先の大磯から八重に送って、その添削を清風に頼んでいる。<sup>(16)</sup>清風が即座に斧正したその和歌は八重から襄へ返され、「池袋様より御直し被下候分は逐て気分のみきたる時に半切に大書すべく候」との返事がさらに八重に返されたが、大書する間もなく永眠することとなり、静風の斧正前のものが、新島襄が詠んだ最後の和歌となった。<sup>(17)</sup>

池袋清風による同志社英学校での和歌の流行は、新島襄の目指した自由教育の、ある一面を示しているようであり、個性あふれる学生を受容する同志社英学校の校風的一端をあらわしているようにも思われるのである。

（注）

（1）『創設期の同志社―卒業生たちの回想録―』（同志社社史資料室編集・発行、一九八六年十二月）二四二ページ。

（2）大阪泰西学館で学び、汽船業社に勤めた高田増平が、明治三十四年に交友関係のある二十人についてまとめた「予が二十詞友」の中に葛岡龍吉についての記述がある（「高田増平資料館」<http://takatanasuhel.web.fc2.com/yoga20.htm/>）二〇二二年二月八日閲覧）。それによると「其同志社不平等ニ与ミシテ退学セシヨリ（十八年の…）」と書かれ、葛岡は明治十八年に退学したとされている。また、在学中に池袋清風の門下生として香川流歌道を修め、雅名が「道香」であったと記される。明治十七年の池袋清風日記には、十一月一日に葛岡龍吉が和歌を学びたいと来訪したので会詠に加入するよう告げたとある。明治二十七年刊行の『浅瀬の波』第二篇下に「大阪 葛岡道香」と掲載されているのが葛岡龍吉と考えられる。

（3）『山陽新報』明治三十四年七月二十七日・二十八日・八月二日・三日・四日・七日・八日・十日・十三日・十五日・十七日・二十二日に掲載。

（4）明治三十二年に鹿児島県都城町に基督教会が設立され、その書記会計を清風が担当するに際して県庁へ提出された履歴書の原稿を正宗教夫が書写し、『山陽新報』にそのまま記している。

（5）『山陽新報』明治三十四年七月二十八日。

- (6) 湯浅吉郎著「同志社初期の文學」の「池袋清風氏と和歌の研究」(『同志社文學』第四号、一九二九年一月)。
- (7) 『創設期の同志社―卒業生たちの回想録―』(同志社社史資料室編集・発行、一九八六年十二月) 山本徳尚、村上小源太、新原俊秀、近藤賢二、蔵原惟郭、三宅驥一、児玉亮太郎、葛岡龍吉、小野英二郎らが池袋清風について回顧している。
- (8) 同右、三二〇ページ。小野英二郎の回想。
- (9) 『近代文学研究叢書』第四卷(昭和女子大学近代文学研究室著、昭和三十一年九月)
- (10) 『同志社大正十三年度報告』(A44-1/1924) 同志社社史資料センター所蔵。
- (11) 「近代化過程における伝統文学―池袋清風の英学と和歌―」(河野仁昭著『人文科学』、一〇号、一九七九年十二月)において河野氏は、典拠資料として「池袋清風日記 明治二十二年」を使用しているが、この論考の六年後に発行された『池袋清風日記 明治十七年 上』(同志社社史資料室編・発行、一九八五年三月)の「注記にかえて―池袋清風とその「日記」―」では日記が明治十七年と二十八年の二冊のみであると述べており、明治二十二年日記は「日記」とは認識されないようになっていたものか。
- (12) 「第二公会録事」『新島襄全集』 宗教編(一九八三年七月、新島襄全集編集委員会編)。
- (13) 『同志社山脈―113人のプロフィール―』(学校法人同志社・同志社山脈編集委員会編、晃洋書房、二〇〇三年一月)。小野英二郎は明治十七年(一八八四)十一月にオペリン大学に留学するまで同志社英学校で学んだ。
- (14) 『創設期の同志社―卒業生たちの回想録―』(同志社社史資料室編集・発行、一九八六年十二月) 三〇八ページ。
- (15) 『新島襄の短歌―和歌的発想と短歌的発想―』(安藤敏隆著、二〇〇〇年三月)。
- (16) 池袋清風著「新島襄先生の和歌」『国民之友』第一〇八号、明治二十四年二月。
- (17) この顛末については「新島襄の「いしかねも」歌雑考」(吉海直人著、新島八重顕彰会 <https://yaenksakurane.jp/archives/yaekouza/1723/>、二〇二二年二月八日閲覧)に詳しく。

凡例

- ・和歌の記載については、同じ和歌でも細部が異なる場合があるが、作者が意図的に変更している可能性があり、記載のまま記した。ただし、明らかな誤字、衍字、脱字と考えられる場合は右傍に「(ママ)」もしくは正しい字を（ ）に入れて付した。
- ・見せ消しについては、左傍に「ミ」印を付し、右傍に訂正された字を示した。ただし墨で塗りつぶされて何文字入っているかわからない抹消については ■ で示した。
- ・作者が文中で故意に空けている空白部分については「<sup>ママ</sup>」で示した。

(表紙)

「明治二十二年以降

池袋清風日記」

明治二十年六月十五日京都に

て昨冬十二月二十八日新社中の

一名東京麻布の津田次郎氏

の乞を今日書き黄昏本人に

渡す但右短冊中下に爪しる

しの十首は旧東京下田女学校

生徒相模小田原の (ママ)

におくるへしとそは此女既に兄の

元親より吾短尺一二葉を得なを

もほしきふりなりしよし

山残雪



はる霞立そめしよりかすか山

雪のひかりものとけかりけり

山家子規

賤の男か畑の大麦色つきて

なきこそわたれ山ほとゝきす

故郷月

故郷の板井の清水の月すめは

むかしのかけも薄れけるかな

山寒月

玉つるきもろはの山に露見へて

いたくもさゆる冬の夜の月

右短冊四葉明治二十年五月

十五日京都にて五月八日同志社

一年生肥後 (ママ) の北里 (ママ) の

乞を今日書き津田に託しておく

りぬ

尾張なる中川常宮君か還曆の

賀に寄松祝といふ事を出しはるく京

都まで歌こはれければ

君か経む千代のためしにひかれては

ふた葉の松もうれしかるらむ

子日

春ことにひけともつきぬ小松原

ちとせの種は神そまくらむ

首夏水

あたらしくつみしこのめに卯の花の

垣ねの水を汲みてけるかな

萩露

風ふけは露とひとつに秋萩の

はなもこほるゝ庭の面かな

みそれ

ちり残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかのへのさと

寢覚恋

独ぬるあかつきたるもあるものを

みはてぬ夢のさめてけるかな

旅行

古郷の親のよはひ（マコ）おもふこそ

なかき旅路の重荷也けれ

言葉書略す

あまつ日の光をうけてひな鶴も

雲ぬこひしき音をやならしむ

右短冊八葉明治二十年六月

十五日京都にて此前四月廿五日

女学校にて一年生尾張の名留

歴少女我に詠草斧正を乞ひ（貞相）□

彼地中川常宮氏還曆の賀に

寄松祝並四季恋雑の名詠を

乞ふへき彼父名留謙三郎日

高宗兵衛久野艶彦平野扶

祝なる四名の幹事の広告書を

示して乞ひ其後同志社男学

校にある尾張の生徒より短尺八

葉を志垣に託しておくりければ

五月末限りしも今日書き翌

日歴女に渡し尾張に送らしむ

故郷梅

ふるさとのあれし垣ねの朧夜に

むかし恋しき梅か香そする

霞中蛙

さら科や姨すて山の夕月夜

霞む田ことに蛙なくなり

海辺晚涼

さし残る夕日す、しく成にけり

浪うちよする浜のまつ原

野外月

なつかしき小萩か花を折に来て

嗟峨野の奥の月を見しかな

みそれ

散り残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかのへのさと

旅行

ふるさとの親のよはひをおもへこそ

ななき旅路の重荷なりけれ

言葉書略す

しらぬひの心つくしに年を経て

世にあふかひもひろひつるかな

あまつ日の光をうけてひな鶴も

雲ぬこひしき音をやならしむ

右短冊八葉明治二十年六月

十五日京都にて此前三月三日に

伊予松山の藤井政美女来り切

に乞ひしを他日東京に送るへく

約し今日書き六月廿一日書翰

に在封し東京在本人に郵送

す

山家梅

しら雪はまた消し残る山さとの

垣ねの道に梅か香そする

山家秋深

賤かやのその、さ、くり落そめて

むら雨さむくなれる秋かな

往事如夢

はかなくもこしかたのみを夢にして

今はうつゝとおもひけるかな

右三首明治二十年十月二

十九日京都にて此前九月廿

四日備前岡山の児島亀士

ぬしの祖母より書画帖を送り

吾歌を乞ひけるにまかせ今夕

書て津田次郎氏に託し同志

社児島氏におくる

或人うみの子の行末をおもひ  
そか為にこたひ吉備の国より

京都に住居をうつさむとて

歌こはれければ

玉島の都の園にうつし植て

まつ間ゆかしきなてしこの花

右明治二十年十月二十九日

（短尺一葉）此前同十四日備中

高粱の富岡幸助氏より或

人の京都に移住について乞

へるよしを頼みければ今夕書き

津田氏に託しておくる

明治二十年十二月二十五日グリ

ーン氏明日より京都発船路を印

度洋に取り欧州諸国を経て米

国に帰られける別におくりたる品

の内扇の中二本に自詠を書き

たれと忘れたれは爰に誌さす

都花

いにしへのならの都の八重さくら

なほ九重にほひぬるかな

右短冊一葉明治二十一年四月

廿二日京都にて邦光社創設

の歌会に其兼題を詠み津田

次郎氏出席に託して出す

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの沖になくほとゝきす

山溪白雨過

谷の戸に雲を残して晴にけり

よ川の奥の夕立のあめ

海辺晚涼

さし残る夕日すゝしく成にけり

波うちよする浦のまつ原

右三首明治二十一年五月一日

京都にて画学校生と岡山の

松原某彼扇に乞へるに任せ

同三日に書ておくる

谷残雪

日かけ見ぬよしの、谷の小笹原

花花のころまで雪ぞ残れる

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの沖になくほと、きす

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

言葉書略す

天つ日の光をうけてひな鶴も

雲るこひしき音をやらしむ

右短冊五葉明治二十一年

四月廿二日宵京都にて津田

次郎氏美濃の北里某よりの

頼（同志社二年生）とて持来り

五月六日書き津田に託て渡す

夕鶯

あらし山人はかへりし夕くれの

花のこかけにうくひすの鳴

右短冊一葉明治二十一年

五月初に此前邦光社当

座題を詠したるを書きしに

不出来にて同六日津田氏に

おくる

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

谷残雪

日かけ見ぬよしの、谷の小笹原  
はなのころまで雪そ残れる

山家子規

賤の男か畑の大麦色つきて

なきこそわたれ山ほと、きす

萩露

風ふけは露とひとつに秋萩の

はなもこほる、庭の面かな

右極庵短冊四葉明治廿

一年七月一日京都にて宿妻

青山某去年の頃より乞ひ

たるを書き

寄道述懐

草も木も神のさかえを見る世に

くらきは人のこゝろ也けり

輩のつみにひかれてともすれば

人をうしともおもひけるかな

明治十四年一月京都にて肥後

の花岡山記念会催しける時

神の為こゝろつくしの友手とり

なきしむかしをおもふけふかな

ある友の九州に伝道にもものしけ

る前に歌こひければ

まこゝろをつくしの海に網曳て

神にさゝけむたまを得よ友

明治十七年三月京都にてく

すしき神の恵をうけし時

神のひくおさな心にかへりなは

あまつ異国はめの前にして

ある都の友より世にあらむ限り

守るへきをしへの歌をと乞けれ

しもかゝるは我こときもの、よ

みうへきにもあらねは

かねてよりなれし此世も今はとて

別る、時のこゝろともかな

右短冊六葉

遠山残雪

はななすみ立そめしよりかすか山

雪のひかりものとけかりけり

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

首夏水

卯あたらしくの花のつみし木のめにうの花の

垣ゑの水を汲てけるかな

萩露

風ふけは露とひとつに秋萩の

はなもこほる、庭のおもかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

名所瀧

那智の山ふりさけ見ればしら雲の

なかるはたきのしふき也けり

右短冊六葉

風前落花

こころありて風もふけはか我窓の

硯の海に花のちるらむ

首夏水

あたらしくつみし木のめにうの花の

垣ゑの水を汲てけるかな

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

潤声幽

我山はおり立つ谷のふかければ

かすかに水の音を聞ゆる

右短冊四葉茶人の頼

右三名分即短冊十六葉明

治二十一年七月一日此前五月

十二日同志社別課神学生令

治の竹内甚吉氏の乞にて今

日書き今夜津田氏に託して渡

す明日帰郷のよし

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの海になくほとゝきす

潤声幽

我山はおり立つ谷のふかければ

かすかに水のおとそ聞ゆる

右短冊二葉明治二十一年七月

一日京都にて去年十二月六日

同志社生徒岡山の野津虎

太郎氏の乞にて今日書き翌

日本山巖太郎氏の帰便に託し

本人に渡さしむそは本人は前日

帰郷（六月卅日）なれば也

山家梅

しら雪はまた消残る山さとの

垣ねの道に梅か香そする

山落花

さきぬともしらて過にし足曳の

山のかひより散るさくらかな

首夏水

あたらしくつみし木のめにうの花の

垣ねの水を汲てけるかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの海になくほとゝきす

山秋夕

高ねには夕日のなこりさしなから

やま道寒し秋のゆふくれ

秋のうたの中に

さを鹿の声ふきおろす松風に

紅葉ちり来る山のへのさと



月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

辞書略く

あまつ日の光をうけてひな鶴も

雲ぬこひしき音をやならむ(ママ)

旅行

古郷のおやのよはひをおもふこそ

なかき旅路の重荷也けれ

潤声幽

我山はおり立つ谷のふかければ

かすかに水の音を聞ゆる

会津白虎隊のかた

いくはくの袖のなみたにやとるらむ

飯もり山の弓はりの月

右短冊十二葉津田次郎ぬし

より其伯母即徳川亀之助

君の母に進上用

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむ梅の初はな

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

夕落花

大井川千とりか渚の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

あるとしの夏大隅の国なるさくら

嶋の温泉にもものしける時

かりねする海人が賤やの明かたに

山ほと、きす初音なくなり

山秋夕

高ねには夕日のなこりさしなから

山道さむしあきのゆふくれ

あるとしの秋三輪長行佐藤こ

れのりうちつれ高雄の紅葉見に

ものして帰らんとする道すから

しくれのふりければ

さして行きぬ笠山はありながら

しくれにぬれて帰るけふかな

山家落葉

もす鳴て夕日きえ行山さとの

垣ねさひしく散るもみちかな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

ある友の旅立しけるとき

さつまかた君かこき出しあしたより

こゝろにかゝる沖つしらなみ

明治十四年一月京都にて肥後の

花岡山記念会催しけるとき

道の為こゝろつくしの友手とり

なきしむかしをおもふけふかな

潤声幽

我山はおり立つ谷のふかければ

かすかに水のおとそ聞ゆる

おもふ友なる

津田久之か東の都に帰るわかれ

に

なからへてまたあはむ日を契りても

さためなき世に別れけるかな

右短冊十二葉津田次郎ぬし

東京江帰り諸知己江進呈用

右前後二十四葉明治二十一年

七月一日京都にて同志社五年

卒業生吾社中熱心の一名東

京麻布津田次郎氏明日よ

り東京江帰郷に付乞はれ今日

夕より夜にかけ書ておくる

雪中梅

麦畑の雪にあとこそみへにけれ

たれかをりけむ梅の初花

谷残雪

日影見ぬよしの、谷の小笹原

はなのころまで雪ぞ残れる

水辺柳

立ならふやなきか本に来て見れば

野川の水のなかれ也けり

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

霞中蛙

さら科や姨すて山の夕月夜

かすむ田ことに蛙なくなり

首夏水

あたらしくつみし木のめにうの花の

垣ねの水を汲てけるかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落て

はかたの海になくほと、きす

海辺晚涼

さし残る夕日す、しく成にけり

浪うちよする浦のまつ原

山寺蝸

山寺の杉のはやしの夕くれに

ななほ(マ)ひくらしの声を聞ゆる

萩露

風ふけは露とひとつに秋はきの

はなもこほる、庭のおもかな

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

秋のうたの中に

くれ竹のふしみのわさ田色付て

雁そなくなる秋きぬらし

秋山家

賤かやのその、山柿色つきて

ところ／＼に見ゆる秋かな

草庵時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

す、のしのやにしくれふる也

江水鳥

難波江のあし分け小舟水とりの

いくたの夢のおとろかすらむ

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

ある友の旅立しけるとき

さつまかた君かこき出しあしたより

こ、ろにかゝる沖つしらなみ

あるとしの秋老たる父君と大和

にももしける時布留川の橋をわ

たりて

たらちねの親と共にも万代を

ふるの高はしわたるけふかな

あるとしの秋天草灘を過るほ

と

にしの海の浪路はる／＼くれそめて

夕つ、高しあま草のしま

右短冊十九葉明治二十一年

七月二日京都にて去年十二

月三日同志社生徒我社中の一

名神戸の畠山市松氏の乞に

て今日書き八月上旬大西氏

神戸行便より送る

菽露

菽露

風ふけは露とひとつに秋はきの

はなもこほる、庭のおもかな

秋山家

賤かやのその、山柿色つきて

ところ／＼に見ゆる秋かな

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

右 短冊三

葉明治二十一年八月廿二日

此前より大西明ぬしの父の

乞にて今日日枝の山寺にて

認め明ぬしにおくる

明治廿一年の秋教の友なる

留岡君か丹波へ伝道にものし

ける前に歌こはれければ

大江山ひとのこゝろの鬼かりに

かみの釦をわするなよ君

右短冊一葉明治二十一年九

月五日六此前八月山寺にて留

岡氏七乞はれ昨夜詠み八今日書

き七日柴原氏に託しておくる

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむうめのはつ花

水辺晩涼

水底の月かけふみてうちわたる

野川のくれそ涼しかりける

秋山家

賤かやのその、山柿色つきて

ところ／＼に見ゆる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

旅行

古郷の親のよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

右短冊五葉明治廿一年九月

廿七日伊与今治（子）の商人彼地の人

この求に供ふへしとて乞ひければ

其夜書き翌日おくる

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

霞中蛙

さら科や姨捨山の夕月夜

霞む田ことに蛙なく也

水郷夏月

かやり火のけふりなかる、里川の

浪間にうかふ月の影かな

野外月

なつかしき小萩か花を折に来て

嵯峨野の奥の月を見しかな

島秋夕

よる浪の外には音もなかりけり

はなれ小嶋の秋の夕くれ

草庵時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

す、のしのやにしくれふる也

高千穂山の奥なる温泉に云々

いくたひのかりねの夢にさはるらむ

峯のまつかせ谷川の水

山家水

瓢たにすて、汲にし仙人画

こ、ろてむすふ山の井の水

右短冊八葉明治二十一年十

月十四日去十二日下京綾小路

新町西入市田久助方より手

紙来り内に伊予今治の商

人木村与平の手紙あり先日

頂戴の御短尺は所望の人多く

て足り不申候付再御認め云々

に任せ今日書き

或人多くの石亀のかたに讃を  
乞ひければ

あしたつの千とせはいはしいは亀の

八百萬代をわれはしめたる

右明治二十一年十二月廿五日

伊与(註)の今治の木村与平来りて

唐紙の金紙に大小七つの石亀を

画きたるを出し此画師より清

風君に讃を乞へといへりとて乞

ひければやかて詠み同廿七日

木村に渡しぬ

明治十四年の春京都にて肥後

の花岡山記念会催しける時

道の為こゝろつくしの友手とり

なきしむかしをおもふけふかな

いつくまでうき世の塵を払ふらん

花岡山のはるの初かせ

右二葉は今治の蜂谷某の

乞の由右もて伝道する云々

寄道迷信

なにとなしうれしく成ぬ世の中の

千々のおもひも神にまかせて

右一葉路に迷ひたる人の再び

神に立帰りたるにおくると

右短尺三葉明治廿二年二月

十日先日別科神学生竹内甚吉

氏より乞はれ今日書きておくる

くれ竹のふしみのわさ田色つきて

雁そなくなる秋きぬらし

右雁など画きたる唐紙半

折の傍に讃をと明治二十一

年十二月廿五日伊与(註)今治の商

人の乞に任せ同二十二年二月

廿八日夕に書き

萬代の春のはしめのさち竹の

はなはこかねの色に出にけり

右前行同時同人唐紙挟

金紙に福寿草と小松を画

きたるに賛を<sup>⑤</sup>と乞へるに任せ

同二月廿八日夕に書き

萩露

風ふけは露とひとつに秋はきの

はなもこほる、庭の面かな

右前行同時同人唐紙小片に

書画帖用也とて萩の歌をと

乞はるに任せ同二月廿八日夕

に書き

山家梅

しら雪はまたきえ残る山さとの

垣ねの道に梅か香そする

谷残雪

日影見ぬよしの、谷の小笹原

はなのころまで雪そ残れる

首夏藤

白樫のみつ枝す、しき梢より

うちなひく也藤浪の花

あるとしの夏大隅の国なるさく

ら島の温泉にもものしけるととき

かりねする海人か賤やの明かたに

山ほと、きすはつ音なくなり

初秋風

小山田のいな葉なひかしふく風の

みにしむ秋に成にけるかな

山寺蛸

山寺の杉のはやしの夕くれに

なほひくらしの声そ聞ゆる

夕時雨

山の端にかたふく夕日たちまちに



きえぬと見ればしくれふる也

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねおしなみふれるしら雪

右短冊八葉前の画賛等と

同時同人の乞にて二月廿八日

夜書き

春曙

ほのくと邦の光もにほふかな

ひらけ行世のはるの明ほの

散る花はかすかに見へて大井川

山もとくらしはるのあけほの

右短冊二葉明治廿二年四

月十八日認め廿日朝湯谷氏

に託し遠藤千胤ぬし宅江出

し右の内一葉を明日邦光社

大歌会兼題出詠に撰はしむ

明治廿二年四月かこしまの友な

る高瀬正宗ぬしかこたひう

つし画の為志那にものせむとて

歌こはれければ

もろこしの南のやまの仙人画

ふかきこゝろを写してよ君

右短冊一葉明治廿二年四

月二十日夕書き(三月廿六日

鹿兒島高瀬氏より一封にて乞

へり)

ある人の賀に松千年之友と

いへる題にて歌こはれければ

千代を経む君より友と見るならば

(ママ)  
ならば

まつこのゝろも嬉しからまし

右短冊一葉明治廿二年四

月二十日夕書き(去二日徳富

氏父上来訪にて乞へり

寄道述懐

さきかけてひらけ行世にかをらなん

なにとなくうれしくなりぬ世の中の  
千々のおもひも神にまかせて

文のはやしの梅の初花

右短冊三葉明治二十二年四

右短冊二葉明治廿二年四

月廿二日夕此前三月五日同

月二十日夕書き（去七日大

志社別課生肥後八代の植田

西明ぬし下鴨小学校試験

方直氏乞にて今日書きて

優等生江褒賞用に一首

おくる尤  
（ママ）の信者の乞ひ

詠しておくれと乞へり）同廿

たるよし

一日夕吾不在間大西明氏

持行けり

海辺晚涼

さし残る夕日す、しく成にけり

夕落花

浪うちよする浦のまつ原

大井川千とりか測の夕くれに

水辺新樹風

まつかせ寒く散るさくら哉

谷陰の若葉をわたる朝風に

海上子規

しるの花ちる山の井の水

箱崎の松原こしに月落て

海上子規

はかたの海になくほとゝきす

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの沖になくほと、きす

右短冊三葉明治二十二年六

月八日東山若王子にて社中

懇親会の時同志社二年生尾

張名古屋の兼松亀吉郎の

乞にて即茶屋の粗硯墨悪

筆を以て書きておくる

### 首夏水

あたらしくつみし木のめにうの花の

垣ねの水を汲みてけるかな

言葉書略す

かりねするあまか賤やの明かたに

山ほと、きす初音なくなり

樽

五月雨のあめのはれ間をふく風に

あふち花ちる庭のおもかな

雨後蛩

むら雨のなこりの露もかくちりて

一軒のしのふにとふほたるかな

水辺蛩

くちなしの花もかをりて池水の

岩間す、しくとふほたるかな

水辺晩涼

みな底の月影ふみてうちわたる

野川のくれそす、しかりける

折にふれたる

若竹のなひくひまより見ゆる哉

夕たちはれし峰のまつ原

右短冊七葉前行同時予備

生肥後の柚原熊二郎の乞にて

即座に書ておくる

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

水辺新樹風

谷陰の若葉をわたる朝風に

しるの花ちる山の井の水

海辺晩涼

さし残る夕日す、しく成にけり

浪うちよする浦のまつ原

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

山家秋深

賤かやのその、さ、栗落そめて

むら雨さむくなれる秋かな

連山雪

あたこよりひえにつらなる北山の

高ねをしなみふれるしら雪

森寒月

こからしの杜の落葉に霜見へて

さえこそわたれ在明の月

潤声幽

我山はおりたつ谷のふかけれは

かすかに水のおとそ聞ゆる

述懐

分け迷ふうき世のあら野我かけの

なかきを見れば月かたふきぬ

右短冊十葉明治二十二年六

月廿六日夜昨年十二月九日同

志社五年生我第三社中の一名

和泉岸和田の鈴木左馬次郎氏

の乞にて今夜書き同廿八日の

朝本人に渡す

旅宿梅

ふるさとの妹か垣ねはいかならむ

旅ねの床に梅か香そする

山溪白雨過

谷の戸に雲を残して晴にけり

よ川の奥の夕立のあめ

山秋夕

たか根には夕日のなこりさしなから

山道さむしあきの夕くれ

草庵時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

すゝのしのやにしくれふる也

右短冊四葉明治廿二年六

月廿八日本年一月十六日同志

社別科生我第四社中の一名大

阪中之島久保莊三郎の乞にて

本日書き同七月三日本人に渡

す

山家梅

しら雪はまた消残る山さとの

垣ねの道に梅かそする

海辺帰雁

霞とも波ともわかぬこしの海の

沖に消行あまつかりかね

雨後花

春雨のはれしあしたの山の端に

残れる雲はさくらなりけり

水辺花

山川の早瀬の波にかせ見へて

ちりぬさくらもみたれけるかな

夕落花

大井川千とりか湊の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

春江花月夜

大の川入江にうかふ月かせの

なかる、花にくもりけるかな

水辺新樹風

谷陰の若葉をわたる朝風に

しゐの花ちる山の井の水

山家子規

賤の男か畑の大麦色つきて

なきこそわたれ山ほとゝきす

夕蛩

夕に／＼月は照らさぬ山かけの

浅沢水にとふほたるかな

酷暑

水無月ののにそひえし雲の峯

もえたつはかり見ゆるけふかな

雨後晩涼

夕立のすきし岡への松蔭の

岩もる水は汲ますともよし

故郷秋風

しのすゝきほにあらはれて古郷の

あれし垣ねに秋風そふく

月前萩

はきにのみふくとおもひし秋風に

月はくまなく成にけるかな

名所萩

機織の声するなへにくたら野の

はきはにしきとなりけるかな

山秋夕

高ねには夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

故郷月

古郷の板井の清水月すめは

むかしの影もうかひけるかな

秋のうたの中に

さを鹿の声ふきおろす松風に

紅葉ちりくる山のへのさと

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれ哉

山家落葉

もすなきて夕日消行山さとの

垣ねさひしく散るもみちかな

みそれ

散残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかのへのさと

冬の日京都にてこし路の友に

かはりて

雪ふれはおもひは出るふるさとの

こしのしら山佐渡の逢山

江寒月

千とりなくなこの入江の水の面に

こほりはてたる月のかけかな

明治十四年一月京都にて肥後の

花岡山記念会の時

いつくまでうき世のちりを払ふらん

花をか山のはるの初かせ

無題

ひとこゝろ浅茅の原の夕月の

露のやとりをたのみつるかな

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

述懐

あし曳の山田のひくち穂にも出す

世をいたつらにかれむ我身か

山家水

のかれ来て汲む人もなきみ代なれば

ひとりすむらん山の井の水

潤声幽

我山はおりたつ谷のふかければ

かすかに水のおとそ聞ゆる

題略す

いくたひかかりねの夢にさはるらん

峰の松かせ谷川の水

仏教徒

天つ日の光ある世にともし火の

はかなき影をたのみつるかな

寄道述懐

草も木も神のさかえを見する世に

くらはきは人のこゝろ也けり

基督教

我国のくらしを照らす神の道

ひらけ行世の光なりけり

奉教記念会の時

掛巻くもかしこき天の高御座

みつのくらしをあふくけふかな

救世主

罪の世をいかにあはれとおほしけむ

かりのまくらもさためかねつゝ

寄道述懐

なにとなく嬉しくなりぬ世の中の

千々のおもひも神にまかせて

たのむへきすくひの神のなかりせは

いかに悲しき此世ならまし

輩のつみにひかれてともすれは

人をうしともおもひけるかな

或教の友九州に伝道せんとして歌

こひければ

真心をつくしの海にあひきして

神にさらけむたまを得よ君

或伝道者によみておくる

罪の海すくひの船は出しよに

おほるゝ人のあるか悲しさ

或教の友にあらむ限り守るへき

歌をと乞ひけるもかゝる歌はわれら

のよみ得へきにあらねは

かねてよりなれし此世も今はとて

別るゝ時のこゝろともかな

ちかひきゝちかひいふよりひとすしに

神のをしへを守りてしかな

天父

いつの世にしりつくすらんあめつちの

父なる神の大みめくみを



重き病にかゝりける人歌こひけ  
れは

くちやすき身をは何せむたましひの  
死なぬくすりをもとめてしかな

或教の友五六歳の子にわかれいた

く悲しみてなくさめの歌をと乞

ひければ

みとり子はまことの父にめてられて

天津みその、花や見ならむ

同志社なる学の館建築につき

定礎式の時

石すえはあまつみ国にすゑてけり

よしやまなひの道しらぬ身も

基督さまりあの女に道を語り給

へるかた

我世をもあすかの里に嬉しきは

岩ゐの外の清水也けり

はしめて京都本願寺見に

ものしける時

瓦屋に立ならひたる立すくみ

ふし拜む世の悲しからすや

明治十七年三月いちしるき<sup>(ママ)</sup>聖靈

の恵をかふりし時

神のひくおさな心に帰りなは

天つみ国そめのまへにして

右短冊四十八葉明治二十二

年六月廿八、九、三十日にか

本年三月 <sup>(ママ)</sup>同志社五年生

我第三社中の一名神戸の畠山

一郎氏の乞にて書き同三十日に

本人に渡す

関路花

玉くしけ箱根の関の明かたに

戸させる雲はさくら也けり

山落花

さきぬともしらて過にしあし曳の

山のかひより散るさくらかな

水辺新樹風

谷陰の若葉をわくる朝風たに

しるの花ちる山の井の水

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

秋のうたの中に

くれ竹のふしみのわき田色つきて

雁そなくなる秋きぬらし

萩露

風ふけは露とひとつに秋はきの

はなもこほる、庭のおもかな

草菴時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

す、のしのやにしくれふる也

みそれ

散残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかのへのさと

潤声幽

我山はおりたつ谷のふかけれは

かすかに水のおとそ聞ゆる

右短冊九葉に

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

右色紙二葉に

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しけりかる

雨後晩涼

夕立のすきし岡への松蔭の

岩もる水は汲ますともよし

山溪白雨過

谷の戸に雲を残して晴にけり

よ川の奥の夕たちの雨

右扇三本に

右明治廿二年六月廿七日同

志社別課生信濃の岡部太郎

氏の乞にて同三十日書き其夕

に本人へおくる

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

夕落花

大井川千とりか測の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの沖になくほとゝさす

水辺晚涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷のあきの夕くれ

山家秋深

賤かやのその、山柿落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

みそれ

散残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふる也をかのへのさと

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

言葉書略す

あまつ日の光をうけてひな鶴も

雲るこひしき音をやなくらん

右短冊十葉明治二十二年六

月三十日神戸の川本辰子<sup>及</sup>□二

妹江礼品として認め同七月四

日五日本人等来訪の時贈る

谷残雪

日影見ぬよしの、谷の小笹原

はなのころまで雪ぞ残れる

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほとゝきす

山秋夕

たか根には夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

右短冊四葉明治二十二年七

月一日に本年一月三十一日夕同

志社別課生我第四社中の一名

但馬の出石湯谷磯一郎氏の

乞にて書き七月三日同所の

河野氏に届方を託す

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

夕落花

大井川千とりか測の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打渡る

野川のくれそす、しかりける

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

山家秋深

賤かやのその、山栗落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれ哉

みそれ

散残るくぬきの枯葉風さえて

みそれふるなりをかへのさと

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

なかき旅路の重荷也けれ

澗声幽

我山はおりたつ谷のふかければ

かすかに水のおとそ聞ゆる

右短冊十葉明治廿二年七

月一日に本年三月五日同志

社二年生我第五社の二名近江

蒲生郡牧野虎次伊与<sup>⑤</sup>

山川隆二郎相間の乞にて書き

雪中梅

麦畑の雪にあところ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

秋山家

賤かやのその、山柿色つきて

ところくに見ゆる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

右短冊五葉明治廿二年七月

二日に昨年青山氏より疎悪の

短冊を出し歌乞はれしに任せ認

未おくらす

めたるも○今度文に我有短冊

に書き七月五日夕におくる

雪中梅

麦畑の雪にあところ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

山秋夕

たか根には夕日のなこりさしなから

山陰さむしあきの夕くれ

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

旅情

古郷のおやのよはひをおもうこそ

ななき旅路の重荷也けれ

右短冊五葉明治廿二年七

月二日に去月十一日発の一封

にて伊勢の宇佐美祐之氏よ

り宅内に懸くへき額用の短冊

四季の詠をと乞はれたるに任せ

序に書き

山家梅

しらす雪はまたきえ残る山さとの

垣ねの道に梅か香そする

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれそす、しかりける

旅情

古郷のおやのよはひ(つマ)おもふこそ

ななき旅路の重荷也けれ

右短冊三葉明治二十二年七

月二日夜に本年五月廿六日

隣の河原氏来り山本氏の三

男北の近所の華族穂積(マ)

氏其短冊二葉を示し尚

吾短冊をも乞はる、よしいひ

ければ今夜序に我有に書き

雪中梅

麦畑の雪にあとこそ見へにけれ

たれかをりけむ梅のはつ花

海上子規

箱崎の松原こしに月落ちて

はかたの海になくほと、きす

水辺晩涼

みな底の月かけふみて打わたる

野川のくれをす、しかりける

夕落花

大井川千とりか測の夕くれに

まつかせ寒く散るさくらかな

谷秋夕

しら雲の外になかめむものもなし

横川の谷の秋の夕くれ

山家秋深

賤かやのその、山栗落そめて

むらさめ寒くなれる秋かな

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれ哉

草菴時雨

こからしの音さえわたるみよしの、

すゝのしのやにしくれふる也

旅情

古郷のおやのよはひをおもふこそ

なかき旅路の重荷也けれ

澗声幽

我山はおりたつ谷のふかけれは

かすかに水の音を聞ゆる

右短冊十葉明治二十二年

七月二日宵に去月廿九日同志

社五年卒業生我第三社中の

一人上野碓氷郡の磯貝由太郎

氏の乞に任せて書き翌三日

告別に来訪の時渡す

月前時雨

うき雲のさためなき世の影見せて

月すむ夜半にふるしくれかな

澗声幽

我山はおりたつ谷のふかけれは

かすかに水のおとぞ聞ゆる

右懷紙（小画仙紙四切）二葉

明治二十二年七月二日夜と三日

に数年来森田惣助妻より

額用にとて屢乞ひしも事多

くて本日に及び外の序に先

日為に買ひたる画仙紙に書き